編集後記

『戦史研究年報』第 26 号をお届けします。

本号は「論文」として、戦史研究センターに所属する研究者による令和 3 年度の調査研究成果の中から 3 本を掲載しました。千々和論文は、戦争終結と戦後のつながりに着目して、戦後日米同盟の成立は太平洋戦争の終結過程と連続的であると論じています。石家・工藤論文は、海上自衛隊における飛行艇の歴史を、戦後初の国産飛行艇の開発と運用を焦点に考察しています。伊藤論文は、イギリスにおける民間船舶の活用について、フォークランド紛争を事例として特に制度面・運用面に注目して検討しています。

巻頭の「口絵」は、掲載論文のテーマにあわせて、太平洋戦争の終戦に際して日本陸軍が発出した「大陸命第千三百八十一號」と、1942 年に日本海軍が制式化した「二式飛行艇」（「二式大型飛行艇」、いわゆる「二式大艇」）に関する史料を掲載しました。

「研究会記録」は、ロンドン大学キングスカレッジ戦争学部のジョセフ・マイオロ教授が研究会で発表してくださった論稿で、両大戦間期の軍事力と国際秩序の関係性を再検討して伝統的な解釈に疑問を投げかけるとともに、近年の国際連盟研究について批判的に論じています。

「国際会議参加報告」は、ポーランドで開催された第 47 回国際軍事史学会大会の概要及び同大会において花田主任研究官が発表した論稿（英文）です。同発表は、国境防衛の視点から、両大戦間期の満洲における日本陸軍（関東軍）の任務と活動について、ノモンハン事件を中心に論じたものです。

「活動報告」には、令和 4 年に戦史研究センターが実施した諸活動、戦後史関連の戦史史料編さん事業の概要、史料閲覧室での閲覧状況等を記載しました。

最後になりましたが、本号発刊のためにご協力いただきました関係各位に厚く御礼を申し上げます。

（立川　京一）